

◇江戸遺跡研究会第79回例会は、2001年3月21日(水)午後6時30分より江戸東京博◇
◇物館学習室にて行われ、佐々木 彰氏より、以下の内容が報告されました。 ◇

千住宿問屋場・貫目改所跡の調査

佐々木 彰

千住宿問屋場・貫目改所跡地発掘調査団

はじめに

江戸日本橋から二里八丁離れた千住宿は、寛永二年（1625）に宿場に指定され、日光道中への最初の宿場であると同時に、水戸佐倉道・奥州道中への起点ともなる宿場でもあった。問屋場・貫目改所はこのような宿場の中心的機能を担った施設の一つである。問屋場は、宿場間の運搬業務に関する人馬等の手配、宿場内外の事務などを執り行なった。後に荷の重量検査のための貫目改所も併設されることになったが、千住宿の場合、問屋場は元禄八年（1695）設置とされ、現在の足立区千住一丁目4-2付近に位置していたとされている。

旧足立区役所の東隣りにも相当するこの地点の周辺は、再開発プランの具体化が急速に進んでいる地域でもあり、郷土博物館ではこうした状況に対処するため、平成12年6月16日～8月4日に発掘調査を実施することとなった。調査面積は231㎡である。

遺構と出土遺物

千住宿問屋場は元禄八年に、貫目改所は寛保三年（1743）に設けられ、改所はさらに文政五年（1822）に増築されたという。文献によれば、棧瓦葺きの粗末な建物であったとされる。幕末に成立した『日光道中分間延絵図』では、これらの建物は一つの建物のように、「L」字形に描かれている。

調査地点では、礎石を伴った砂利面を計4面確認したが、調査の結果、最下層の砂利面が江戸時代末葉頃（19世紀前半）の地山であることが判断された。砂利面を良好に確認したにもかかわらず、礎石の遺存状態はいま一つであったが、わずかに残る礎石下より杭跡の発見がある。これらの杭列は礎石の支えに用いた可能性が高まり、この杭列を

辿ることにより、建物跡の配列を推定することができた。二棟が復元され、問屋場・貫目改所と想定された。この二棟を組み合わせると、すなわち『絵図』に描かれた「L」字形配置となる（*）。

遺物は特に19世紀以降～昭和までのものが多い。後に荷捌き場と思われる地点の深掘りを行ったが、わずかにこの地点に17世紀末葉の遺物が散見されたにすぎない。元禄八年の問屋場建設の際に、埋土とともに廃棄されたされたものであろう。また調査区西側隅で確認されたゴミ穴からは、釘書きで「千」の文字を刻んだ磁器皿が出土している。千住の「千」と思われ、この建物で使用後に廃棄したことが考えられる。また増築後の貫目改所の屋根を葺いたと思われる棧瓦片の出土もある。

まとめ

深掘りの結果、問屋場・貫目改所の敷地が客土によって、造成されたいことも明らかになっている。街道沿いの埋め立てによって、建物の敷地が確保され、その上に建築物を配することにより、千住宿が成立した様子が想像されたのである。



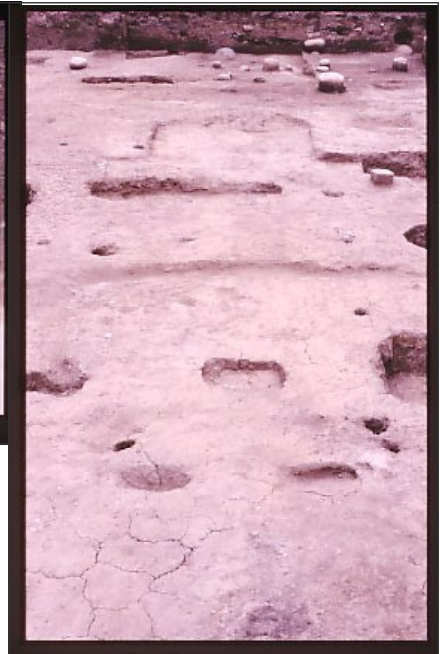
第1面全景（南から）



C4G全景（北から）



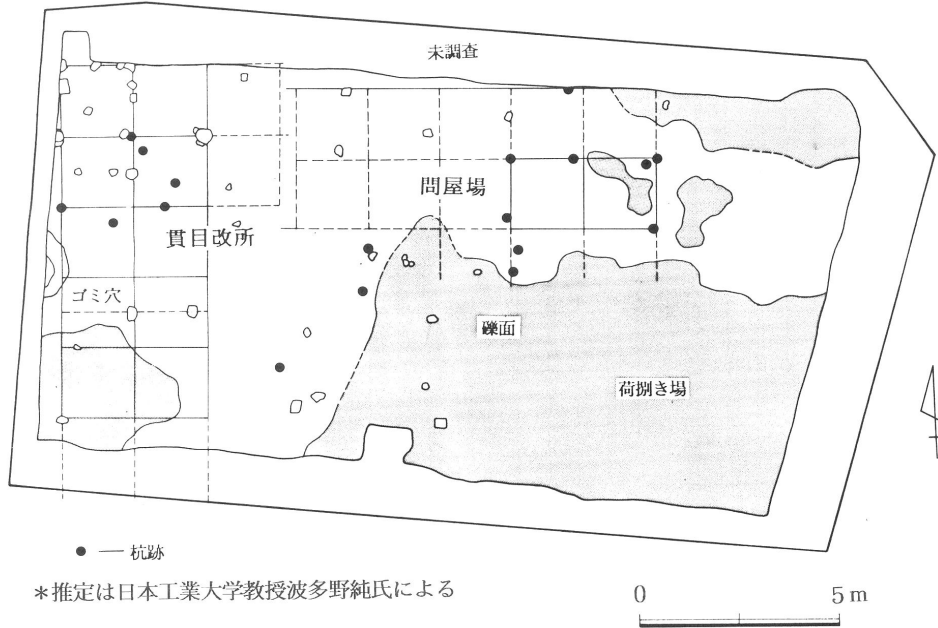
「千」の釘書の磁器皿出土状況（A2G-7坑）



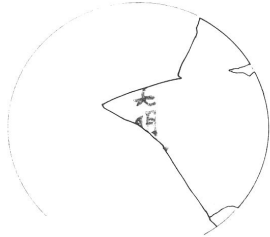
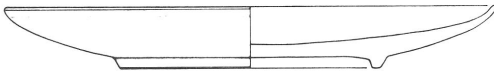
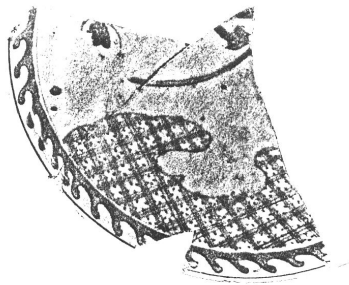
第3面下全景（東から）

（*）東京都教育委員会「東京都遺跡調査・研究発表会要旨26」（平成12年12月3日）所収の『誌上発表 足立区 千住宿問屋場・貫目改所跡』で掲載した、日本工業大学波多野純氏の示された問屋場・貫目改所の推定位置を全く逆に取り違えてしまっている。文章も同様である。この場を借りて訂正するとともに、先生に深くお詫びしたい。

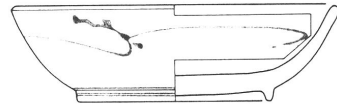
問屋場・貫目改所跡第四面の状況



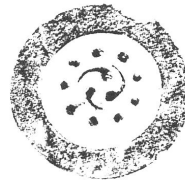
主な出土遺物



荷捌場下層出土



ゴミ穴出土



包含層出土



▽研究会紹介▽

鹿 児 島 陶 磁 器 研 究 会

関 一 之

鹿児島の考古学は上野原遺跡に象徴されるように縄文時代、それも特徴的な早期・草創期の研究がその王道を走り、牽引している状況は誰しも認めるところであろう。かつて、東高西低といわれた縄文学はこの数年間で新しいステージを発見したような感もある。こんな環境の中、平成10年に薩摩焼を対象にした近世陶磁器の研究会が発足した。近世遺構や窯跡の調査が、研究の遅れを指摘し始めていたという背景の中、旗揚げの話はこの数年前からあった。丁度この年は「薩摩焼400年」。鹿児島県を挙げて、多くのイベントが計画されている年であった。実はこのことに内心苦しい思いがあった。何を根拠に400年なのか、研究や議論が充分に行われていないのに、お祭り騒ぎが先行している状況を疑問に思う同志が、機が熟したのを感じて腰をあげたのである。

鹿児島の近世陶磁器の研究は、昭和16年に発行された「薩摩焼の研究」という当時としては高いレベルの研究書があるが、以来60年、研究成果の乏しさに驚く。しかし、最近では窯跡の発掘調査や消費地の出土品も飛躍的に増加しており、これに研究の進んだ肥前地方の資料や調査の進む江戸遺跡の手法を参考として賛同者が集い、情報を交換し討議を重ねることにより、埋もれたままの薩摩焼の歴史を掘り起こすことができると考えている。

現在、会員は35名。鹿児島・宮崎の埋文担当者を中心に、大学の研究者、博物館学芸員等で構成される。研究会は年3回を目標に、現在（2001.02.06）までに9回の研究会を開催している。活動内容は、窯跡に赴き、窯ごとの出土資料を検証し、出土品の検討会を実施し、手作りの会報を発行している。また、息の長い研究会でありたいために、会員や事務局に過多の負担がかからないよう、頻繁な研究会の開催や公開した会員の募集は現在の所行っていない。

薩摩焼は、江戸時代を通してほとんど藩外に持ち出されていないといわれている。また、藩外産の陶磁器の持ち込みや使用も規制されたようで、消費遺跡で共伴関係の検討資料が未だ充分でない状況にある。徐々に資料の蓄積を図り、窯ごとの資料を的確に検討して編年を作成することを当面の課題として活動したい。また、将来的な目標としては「薩摩焼の研究」を踏み台にして、それを越えていくことである。「同じ問題意識を持った仲間が集って、できることから始めよう。語り合えば、必ず見えてくるものがあるはず」。少数でも機動力のある研究会でありたいと考えている。

○イベント情報

四国徳島城下町研究会

日 時：平成13年7月7日(土)～8日(日)

場 所：徳島大学総合科学部 3F 310教室

テーマ：「四国と周辺の土器―焙烙の生産と流通―」

発 表：「問題提示・香川・生産窯」佐藤竜馬/「総括的様相・民俗例」難波洋三/
「高知」浜田恵子/「徳島城下町」日下正剛/「徳島西部」大北和美/「和歌山」
北野隆亮/「岡山」乗岡実/「広島」福原茂樹/「山口」柏本秋生/「九州東部」
吉田寛/「川島焼」北条ゆうこ/「伊丹郷町の生産窯」小長谷正治/「江戸の
生産窯」谷口栄/「土器職人と商業」吉田伸之/難波洋三の焙烙レクチャー

申し込み：FAXまたは郵送にて 日下正剛宛（6/22まで）

FAX 088-699-6396

779-0108 徳島県板野郡松茂町笹木野字八上57-1 A-206

第80回例会のご案内

日 時：2001年5月16日（水）18:30～

内 容：「大村藩下屋敷跡の調査―港区東京大学白金構内遺跡―」

大成 可乃（東京大学埋蔵文化財調査室）

会 場：江戸東京博物館 第2学習室

（大階段北側の通路を東に進み、駐車場の
脇を直進し、左側の夜間入口より入る）

交 通：JR総武線両国駅西口改札 徒歩3分

問合せ：江戸東京博物館

03-3626-9916（小林・松崎）

東京大学埋蔵文化財調査室

03-5452-5103（寺島・堀内・成瀬）

江戸遺跡研究会公式サイト

<http://www.ao.jpn.org/edo/>

